



客間から見える小さな流れ。眺めていると、時のたつのをしばし忘れる。(自邸) 2020.6.10 筆者撮影

家には庭が必要ですよ



1958年生まれ。愛媛県今治市出身。1978年、越智造園を創業。1996年社名を有有限会社創造園に変更。2004年から2010年、京都天龍寺宝蔵院や東京青山善光寺など各地で「庭空間の創造」「石の造景」などをテーマに個展を開催。2011年、第9回日本庭園協会賞を受賞。2017年から四国支部長を務め、現在は評議員。2021年、現代の名工(厚生労働大臣表彰)を受賞。座右の銘:最後まであきらめない。限界に挑戦。

越智 将人
おち まさと

先日、ある人に「造園業の人は、皆さん家には庭が必要だと思って、庭をつくっているのでしょうか」と質問されました。ただ仕事として庭をつくっているのだろうか。それもあると思うのですが、自分はどうだろう。

13年前、自宅を建てる際、以前に庭をつくらせていただいた方に「基本設計は自分ではない、思っている家にはならないよ」とアドバイスされて、明るく、風の通り抜ける森の中に住んでいるような住みやすい家とを考えて、友人の大工に平面図と立面図だけで依頼しました。詳細や内装はつくりながら決めました。でき上がった家では、家中どこにいても緑あふれる庭が見えます。食事の時も、湯船につかっている時も。開口部が多いので窓を開けると風が通り抜け、客間と浴室からは滝と小さな流れが見えます。お茶を飲みながら、水が流れる景色に時がたつのを忘れ、来客は1時間の予定が3時間にもなります。

陽射しの調整は落葉樹です。夏は、木洩れ日となり、冬は部屋の奥まで暖かい陽射しが入って来て日向ぼっこができます。これはエアコンよりも暖かい。最近では、高気密高断熱の環境にやさしい家と言われていますが、本当に環境にやさしい家は、庭が上手く機能している家ではないでしょうか。我が家は、庭がないと成り立たない家です。

このような気持ちいい家に住んでいるから、今では心の底から「家には庭が必要です」と人に勧めることができるし、また自分も庭の樹々から自然の力をもらっています。

今では、『建築と庭』というテーマを誌面や講習会で取り上げています。良いことではあります。まだまだほとんどの人が庭は付け足しという意識です。

建築家・造園家は、自分の家に庭をつくり、心地よい住空間に暮らすことで、今一度住まいの在り方を考えることができると思います。現代は、昭和の時代と違い一般の住宅地はますます狭くなり、駐車スペースを取ると庭をつくる場所も無いような住宅事情ですし、また庭にかかる予算も少なくなっています。

今の時代は知識よりも知恵を使い、家の庭に何が一番必要かを考え、住宅の見栄えだけでなく、住む人が心豊かに暮らせる住空間を創るために勉強していこうと思います。

(評議員)

第3回 飯田十基 いいだじゅうき

2022年5月13日
緑と水の市民カレッジ

飯田十基師の人と庭にただよう豊かな香り

龍居 竹之介（名誉会長）



はじめに

飯田十基は太っ腹
たいじん
で情にあつい人柄で大人の風格を備

【飯田十基プロフィール】

1890年～1977年。千葉県成田市生まれ。本名は寅三郎。千葉県立旧制成田中学校2年中退。松本幾太郎、岩本勝五郎、鈴木次郎の下で修業を積み、築地の工手学校（現工学院大学）土木学科に通い、図面の書き方取得する。1918（大正7）年、東京目白に飯田造園事務所を開設。1934（昭和9）年に、事務所を渋谷区初台に移転する。日本の造園家、作家として活躍。昭和初期の「雑木の庭」の創始者として知られる。1974年から1977年、日本庭園協会第7代理事長に就任。代表作は、料亭初波奈（1957）、ワシントン大学内日本庭園（1960）、料亭朋松（1961）、不二迎賓館（1962）など多数。



不二迎賓館（1962）など多数。

えた人でしたが、手掛けられた多くの庭には全て深い愛情を寄せられていたように思います。といっても甘さはありません。むしろ厳しい意見も随分と聞かされました。

それにしてもよく飯田夫妻にはご厄介になりました。でもこちらが全く記憶していないような話を聞かされるのは楽しかった。だから話があちこち飛びそうなのを、今日は危ぶんでいます。

まず、名前の話をしましょう。「十基」は本名ではありません。「寅三郎」というのが本名です。

1955（昭和30）年頃のある日、突然、我が家に絵はがきが届きました。宛名面の下半分に、「これから十基と名乗ります」と、こちょこちょと書いてある、そういうご挨拶でした。

その名の謂れというのは、「戦後十年が経って、もうそろそろ引退かと思ったが、戦後の庭がどういう風

になっていくのかも少し見ていた、後輩も指導したい。歳は取ったけれど、ここでもうひと踏ん張りしなきゃいけないと思った。そのために、歳は若くなければいけない。そこでこの際、勝手に十歳若くした。

十歳もとへ帰るということで、始め「帰」という字も書いたが、何か収まりが悪いから、「もと」を「基」と書いて「十基」とした」ということでした。

当初は「じゅうき」と呼んでいましたが、言いにくいので、「じつき」と呼ぶようになったのです。「寅三郎」の寅さんから、大変な変貌で、老大家のような名前になったわけですから。それから十年、ご当人が考えていた以上のご活躍をされました。

実は、日本庭園協会にとって、飯田は、大変な救世主でした。

1943（昭和18）年頃、戦前から続いていた団体は、戦時中の一斉統制で、解散や合併を命ぜられました。そのとき、日本庭園協会は休会という形をとり、機関誌『庭園』も、1944（昭和19）年3月をもって

休刊としました。

終戦後の1946（昭和21）年頃、焼け野原となった東京の復興のためにも会を復活させていかななくてはならないという意見が元幹部から出はじまりました。

その頃、日本庭園協会の会長は團伊能男爵でした。実業家、政治家である團は、美術史家でもあり、庭園に興味、関心を持っていて、第4代会長（在任：1941～1960）を引き受けてくれたのです。しかし、実際には力を入れておらず、私では務まらないということで会長を辞しました。後任の第5代会長として推薦してくれた人はブリヂストンの石橋正二郎（在任：1960～1964）でした。團と石橋は、親戚でした。この方々は、庭や庭づくりに対する熱意があるとは言えず、この協会を何とかしてやろうという気はさらさらありませんでした。一方で、元幹部などからは、日本庭園協会の復活を望む声があがっていました。1964（昭和39）年からは、田村

剛（在任：1964～1974）が会長職を引き継いでいました。

この頃、もう一つ関連団体として「日本造園士会」がありました。「建築士」と同様に、国家資格として「造園士」を確立しようという目標を掲げて、1938（昭和13）年に活動を始めた団体です。

実は、日本庭園協会も日本造園士会もその発起人は同じ顔ぶれでした。その方々は、同じように歳を重ね、終戦後は還暦を過ぎていました。

そんな時、両方の会に関係し、日本庭園協会第7代理事長（註1）となった飯田（在任：1974～1977）の提案で、二つの会を一つにしようということになり、1977（昭和52）年に合併しました。つまり、飯田がいなければ、今の日本庭園協会はなかったかもしれないのです。そういう意味で、飯田は日本庭園協会の大切な恩人と言えるのです。

内容の濃い修業時代が 自在に庭を生みだす凄さを生む

一般的には、飯田は雑木の庭を流し、雑木の庭の開拓者と言われている人です。

実際、飯田は雑木の庭をつくっていました。昔から雑木を使った庭は多くあり、他の植木屋も使ってい

なかったわけではありません。しかし、雑木の独特で新しい扱い方というものを見出し、新生命を与えたのが飯田という人です。

飯田が他の人と違ったのは雑木を軽視しなかったところにあります。豊かな数量、手頃な価格、磨き上げたような庭木には見られない人なつっこい表情などに気づき、幅広い層の人が庭に親しめる機会が増やせればとの思いにかられたことにあります。これは、飯田自身が修業の中で得た実感にも出ています。

私が言いたいのは、飯田の庭づくりは、雑木だけではなくてもっと幅が広いということです。幅が広い中の一つが雑木であったと、そう考えてみたいと思います。

そこで、飯田が何でこの道に入っただかということからお話します。この道に入るにはいろんな方法があるわけですが、一般的には庭が好きだから、あるいは家業だから庭師になつたというのが普通です。

ところが、飯田は、庭をつくっている現場をのぞいて、この仕事をしたいと思ったのです。地元の成田山新勝寺で、東京は根岸の庭師、松本幾次郎の作庭ぶりを見て庭に関心を抱き、成田中学を退学し、14歳で松本門下に入門し、庭の修業に踏み出

したので。

飯田が弟子入りしたのは、日露戦争（註2）がはじまる前くらいの頃です。明治維新で大名という身分はなくなっていました。屋敷は全て国のものになり、空いた屋敷を軍隊などが利用していました。

江戸時代には、大名は上屋敷、中屋敷、下屋敷という内容の違った屋敷をもっていました。新政府は、侯爵や伯爵に身分が変わって華族となった大名たちに、中心地で一つ、郊外で一つの二カ所の所有を認めていました。大名たちは中屋敷とか下屋敷の所有を許されて引越しま

す。そうすると、何が始まるかというと、上屋敷にあった立派な庭の材料を全て中屋敷または下屋敷に運び、上屋敷にあったような池や築山のある庭を新しくつくったのです。

このような大型の庭づくりは意外に大変なのですが、松本は大変巧みにやっていました。大きな大名屋敷の庭灯籠、庭石、植木、一切適切ばらして荷車にのせて新しい屋敷に運んで、その材料を使って前と同じような大型の庭をつくる。この仕事にまず飯田はつきまりました。松本の下で、新政府の役人など、例えば渋沢栄一の飛鳥山の屋敷の庭づくりにも

参加して、大規模な庭園をつくる技をまずは覚えました。

しかし、飯田はそれで満足していません。少し違うことを覚えたいと思って、次に雑司ヶ谷の親方、岩本勝五郎に弟子入りました。

岩本の下では、椿山荘や小田原の古稀庵といった山縣有朋の邸宅や別邸の庭づくりをやっていました。これはお大名のスケールの大きな庭園とはまた違って、大変自然的なものでした。

椿山荘を例にとれば、山縣は岩本に自然味を残すようにと言います。どこまで自然味を残すのかと聞くと、山縣は、「地震があつてここにある崖が崩れる。そうすると様子が変わる。そういった変わった味も面白いから、その壊れたところは残しておけ」と言います。

こういうリアルな自然味を求めていたということです。岩本はそれに応じて自然味のある庭をつくっているのです。前の親方とは感じがちがう庭のつくり方です。

最初は立派な庭のつくり方、次は自然味を大事にした庭づくりでした。両方とも決して狭くはない敷地ですが、内容は似て非なるものでした。飯田は広い敷地の異なる内容の庭づくりを学んだところで、何か足

りないものもあるということに気づいたのでしょうか。

その次に選んだ先生は、鈴木次郎です。鈴木は日本橋の茶庭師で、お茶の師匠でもありました。ここでは、それまでとは全く違う内容の茶庭や小さな空間の庭づくりを学んだというわけです。

庭には、いろいろなものがあるわけですが、それを学ぶために、それぞれを得意とする庭師の親方に師事するというのは、自分に足りないところを自覚していて、さらに型にはまった庭づくりでは庭にならないことが分かっていたのでしょうか。

飯田は親方から学ぶ一方で、工手学校^(註3)に通っていました。築地にあった工手学校はこの時代唯一の西洋建築をはじめ、建築全体に対する講義をする学校でした。

飯田はこうして土木科に通学しながら、一方ではどっぷり関東の大庭園で庭修業を続ける青年期を送っていました。

庭を学ぶ基礎段階での正確な勉強の仕方は、結局この人に自信をつけさせ、大人の風を備えさせました。

雑木の庭の生みの親と簡単に言われますが、その雑木の庭は、単に雑木を使った庭をつくったというものではないのです。雑木の良さがある

から使うのだという、この発想の転換があまり伝わっていないと私はずっと思っているわけです。

飯田の体の中には、「なんでわざわざ従来の自然林を壊して作庭式の方法で庭をつくるのか？武蔵野のどこかで美しい自然をつぶしての庭づくりは疑問だ」という思いが出てくるのです。何か違うような気がする、そういう思いを持ち続けたのでしょうか。

新しい時代になり、新しい生活になると、それまでとは違って今までの大名屋敷とは全然違って、和洋折衷、和洋両立というスタイルの邸宅になると、そこに築山林泉式の庭があってもいいのかというもどかしさもあったのではないかと思います。

やがて、内容の濃い修業時代の成果がすごい庭を自在に生みだしていくのですが、とにかく修業時代は全てにわたって一生懸命覚えました。そのため、私の強い一面も出てきます。私の強いところはありますが、同時に人を育てていくことにも非常に力をつくしました。

人を育てていくことにも非常に力を尽くす

1918（大正7）年に、飯田が造園の事務所（飯田造園事務所）を開

いたとこのことです。これは日本庭園協会の発足の時期に当たります。

その前後から日本の国内には、庭園あるいは公園などを学ぶ学校が非常に多くなってきました。東京高等造園学校^(註4)もその一つで、その卒業生を飯田は、迎え入れています。

このことは庭師の親方としては珍しかったと思います。学校で学んだとは言え、海のものと山のものともわからないものをどうするんだ、そんな学校を出て植木屋ができるかといった思いは親方達にはあったはず。しかし、飯田は、自身も学校で学んだ経験があるからでしょう、次々に雇っています。

最初の学校卒の弟子は、高村弘平といいました。高村は、後に東京の五島慶太に可愛がられて、二子玉川園などをデザインした人です。この人が飯田造園事務所での学校卒の第1号です。近年で有名な弟子に小形研三がいます。小形も何号目かの学校卒の優秀な人です。学校出身者を雇って、活躍の場を広げさせました。これも偉いことだと思っています。

先程、「十基」と名のつたのは、10年若返りもう一回若い人を育てようという気概があったからと話しました。その時期に育てた弟子たち

は、今も活躍しています。日本庭園協会のメンバーにもたくさんいます。つまり飯田は最後まで人を育てることに力を尽くした人なのです。

根気強さと温かみのある人柄

自分が教える立場となつてからの飯田を一言でいえば、大変包容力が豊かな人ということになります。それだけではなく、物事の機微に聡いというか、人のことを親身になって考えてあげる人です。進路についても結構アドバイスしていたようでした。

人に親身である人が、日々の生活の中で怠惰であろうはずがありません。茶人であると同時に、大変芯が強く、根気強く、勉強熱心というか、それは晩年も変わっていませんでした。何かというと机に向かってものを書いている。そうでなければ茶杓を削っている。その姿には根気強さだけではなく、温かみがありました。

確かに茶杓は年中削っていました。それには自分が使う茶杓をつくるケースと、昔から伝わっている国宝級の茶杓の写し（コピー）をつくるケースがあります。例えば、「泪^{なみだ}（註5）」という名の茶杓があります。そうした銘のついた立派なものの写しをつくるのです。1本削って喜ぶだけでなく、量産して喜ぶとき

もありました。量産の例では、自分の金婚式の記念に何か贈ろうということになり、茶杓を50本作ったのです。この50本が誰の手元にいくのかと、本人は内心楽しんでいたとか。

三味線が好きなのに因んで、「ペン寅」というあだ名もあったと教えてくれたのは高村弘平です。ペンペン好きの寅さんだからということですね。そんな「ペン寅」の一面を紹介します。

戦前から、日本庭園協会の創立メンバーの上原敬二と私の父、龍居松之助と飯田は仲がよかったのです。飯田がリーダーとなって上原と松之助の3人で枯山虎杖会こざんこじょうかいという会をつくっていました。その会は、料理屋に集まって親睦を深めていました。

戦後は、私も少しは大人になっていたので、ときにはお供していました。上原と松之助以外の参加者はほとんどが植木屋でした。会の最後は、邦楽の清元節の「神田祭」などでしめくり。ペン寅はやっぱりペン寅なんだと思いました。こうしていつも古さと新しさの混ざった世界の中心にいるのを見ていましたね。

もう一つ、人間関係として、小形研三について話します。小形が復員してきて、飯田の家に夫婦そろって挨拶に来たときの情景を私は何度聞

かされたことか。

「ある夜、書斎にいたら、何か外で人の気配がする。それで誰か来たようだなと目を凝らしていると、すつと近づいてきた二人づれ、よく見ると小形夫婦だった！ああ、生きてたんだ」

その時のことを思い出すたびに声がうるんで……。本当にいい先生だなあと思いました。

カメラのズームレンズ的な視野で自在に庭を生みだす凄さ

飯田の仕事の凄さは観察力の深さから出ていると思います。しかもその観察力は鋭く、かつカメラのズームレンズに似て視野を広くしたり狭めたり自由自在であるらしい。面積に合わせ、しかも建物との調和もよく、かつ人を温かく包み込めるよう雰囲気をつたえ、

得ないのです。

同じようなことをする人もよく見かけます



ワシントン大学植物園内日本庭園 平面図



豊かな自然を感じる大スケールの空間美
ワシントン大学植物園内 日本庭園 (1960)

が、大抵は飯田にはかなわないと思います。それは残された作品の写真を見ても感じ取ることが出来ます。例えば、大面積の庭園にはそれにふさわしい規模のものをつくるのは当然ですが、あくまでも住み手である依頼者の脳裏にある希望の景観を生み出すことを第一と考えます。つまりはお客が第一なのです。

かつて小説直木賞の第1回受賞者としても著名だった作家の川口松太郎が私にこう語ったことがあります。「庭のことを作品に書くときは、なんととっても、相談相手は飯田だね。あれはこつちが知りたいと思うことはすぐわかるからね。こちらの頭の中で描こうとしている庭の顔が見えるのかね」と大絶賛でした。この人もわりに毒舌家で、人のことを

ほめないで、年中役者を怒鳴り散らしていたような怖い先生でした。それが絶賛なのです。3回ぐらい「飯田はいいな、飯田はいいな」と言うのを聞きました。川口は飯田の知識の広さ、技術の確かさなどに感ずるところが多かったようです。



趣深い雰囲気醸す木橋 不二迎賓館(1962)



玄関前のたたずまい 料亭・朋松 (1967)



ビルの屋上とは思えない落着き 三枝ビル屋上(1967)

飯田自身による 「関東と関西との（庭の）違い」

飯田自身の手になる文章も一つ、この際紹介しておきます。1969（昭和44）年8月に、表千家不白流・雀和会で「茶庭について」という講演をしています。その中の「関東と関西の違い」という一節で、東京と京都の違いの話ができました。難しくなく、ごく当たりまえのことを言っています。

関東だ関西だから、といっても別に茶庭をつくる気分が違うわけではない。ただ、付近の環境が異なり、材料が多少違うので作庭方法が違うわけである。

京都方面では、あの美しい山に四方を囲まれた景色があるので、自然、作庭するのにこの景色を背景とするのは当然のことである。

材料としても、あの幹の美しいアカマツ、そして地被の苔と、到底東京などでは真似ることができないような状況の土地に居られる人は、自然に慣れているせいか庭をつくるのに作庭式のものが多くつくられている。

東京方面の場合は、これとは逆であって、いずれを見ても殺風景であるので、作庭の場合も多く極く自然風が要求されるわけである。

では、どんな庭が好かれるかというと、昔の武蔵野を懐かしむせいかな雑木を使った庭が一番好かれるようである。庭木の種類も草庵式の茶室に使う場合は、相当限定されることになる。それはあまり目につく花物を避け、また大葉ものは苔などをい

ためるので植えられない。比較的手に入りやすいのはコナラ、ソロ、ゴズイ、ハゼ、ネム、マユミ、エゴノキ、ムラサキシキブ、それにモミジ、シデの種類である。

常緑樹を混ぜて植える場合も大葉のものよりも針葉樹のスギ、ヒノキ、カヤ、サワラなどが雑木との調和がよいようである。

ごくごく自然の表現です。でも、その裏には、「やってみな、そう簡単にはできないよ」という気概がなくとなくあるような気がしてしょうがありません。

おわりに

飯田のつくった実物の庭は、ほとんど滅亡に近い状態にあります。いろいろなタイプの庭の工夫やアイデアは写真で見えていただくしかありません。

飯田のような人たちが現代感覚を持った日本の庭をつくってききました。ですから、これからのことにな

ると、飯田のような作品を見て学ぶことが必要です。写真を見ると、古い日本の庭のように見えるかもしれませんが、しみじみ見たら現代の感覚と共通する要素があるとつくづく思います。

また江戸の大名屋敷の大庭園群の淋しい末路の数々に接して見て虚しさを感じたという体験も、後の飯田を生んだ一因かとも思います。

そしてさらには、庭の幅が広いことを身をもって教えてくれた人でもありました。そのような点で、日本の庭の世界の大人人なのだと思います。

個人的には、飯田をもっと知ろうという若い人がどんどん出てくることを心待ちしている毎日です。

（名誉会長）

（文中、敬称略とさせていただきます）

註1 協会代表の呼称は定款により理事長または会長と変化した。

註2 1904（明治37）年2月から1905（明治38）年9月

註3 現在の工学院大学

註4 現在の東京農業大学地域環境科学部造園科学科

註5 千利休が自から削り、古田織部に与えた。その後、織部はこの茶杓用に、長方形の窓をあけた筒をつくり、その窓を通してこの茶杓を位牌代わりに拜んだと伝えられる。

写真…全て『飯田十基庭園作品集』より

参考文献

『庭別冊3』、建築資料集成社、1977
『飯田十基庭園作品集』、創元社、1980

庭に向かう私の姿勢

第1回 『北方圏 人と気候風土と庭』

桃井 賢二

2022 (令和4) 年5月29日 (日) オンライン講座

はじめに

北海道の歴史は非常に浅く、幕末頃からと思われがちですが、13世紀には大和民族が蝦夷地の渡島半島に進出しており、1600年代の江戸初期には松前藩が成立しているの

で、意外と長い歴史があります。北海道に文化をもたらした要因の

【桃井賢二プロフィール】



1964年生まれ、北海道函館市出身。専門学校卒、建設会社勤務を経て、実家の造園業に従事。

1990年、熱海市「熱海上多賀芸術家村」、2000年、秦野市戸川公園日本庭園「谿風の庭」の伝統庭園技藝参加。2010年、八雲町「静寂の郷」にて開催の伝統庭園技藝に現地スタッフとして参加。この頃より、盛美園、三溪園、瑞泉寺など文化財指定庭園の修景復元作業に従事。2013年、「東日本大震災復興記念庭園」の伝統庭園技藝に参加。

一つとして北前船が挙げられます。

北前船は、江戸中期から明治30年代、大阪から瀬戸内海を通過して日本海に抜け、北海道までを往復していた動く総合商社でした。品物をただ運ぶだけではなく、京都などの文化の伝播に貢献しました。

庭への貢献は、本州の庭文化を持ち帰ったことが挙げられます。また、船のバラスト代わりに石を積んで航行し、その石を庭石に使ったのです。事例としては、函館市の旧岩船氏庭園内の伊予青石が挙げられます。次に、函館にある五稜郭跡と旧岩船氏庭園の管理を通して、北海道の庭園管理の実情についてお話しします。

特別史跡五稜郭跡

五稜郭は、1857 (安政4) 年に着工して1866 (慶応2) 年に完成した西洋式の城郭です。

五稜郭内にある奉行所の周りにア

カマツ林があります (図1)。これは、推定樹齢約140年、約100本あるとされていますが、枯れたり伐られたりして現在は88本です。樹高は17〜21mほど。佐渡から種子を持ち込み、函館近郊の苗圃で育成し、植樹したと伝えられています。

当社がアカマツ林の管理を手掛けるようになって8年経ちます。それまでは枯れ枝を取り除く程度で、一切手が入っていない状態で、すべてを枝抜き剪定するのに6年くらい掛かりました。現在は二回り目に入っています。

管理方針としては、全体の景色の



図1 五稜郭跡 アカマツ林 2018.7

中で、樹林の持つ氣勢に逆らうことなく、違和感のある部分を取り除いていくことにしました。抜くところは抜く、残すところは残すというようにメリハリをつけて管理しています。どこを残そうかと頭を悩ませましたが、何とかそれなりの景色になってきました。今は奉行所前から空が見えるようになりました (図2)。

図3は管理作業中の状況です。左に高所作業車があり、右にザイルが下がっていて、ツリークライミングで手入れています。全て高所作業車で行えば楽ですが、奉行所の塀があり、手前には車が入りません。そ



図2 五稜郭跡 復元された奉行所 2018.7



図3 五稜郭跡 ツリークライミングによる手入れ 2017.6

こで、ツリークライミングで上がって作業をしています。

どこの地方でも、樹木が大きくなりすぎて、どうしたらいいだろうというところが結構あると思います。ツリークライミングによる作業は、文化財庭園などの管理で、今後必要になってくる技術ではないかなと思います。

名勝旧岩船氏庭園（香雪園）

1898（明治31）年に、函館市在住の呉服商、岩船峯次郎が小作人などを使って作庭したものです。1907（明治40）年には地域の景勝地となっていたということです。大正になって京都の知恩院の貫主が来函したおりに、「香雪園」と命名したと言われています。1920（大



図4 旧岩船氏庭園 紅葉が美しい池の佇まい 2020.10

正9）年に、京都から辻知月（つじちげつ）という庭師を招き、3年かけて再整備しました。

2001（平成13）年、国の名勝に指定され、主要な部分を当社で管理するようになりました（図4）。

この庭園は、当社から徒歩5分くらいのところにあり、子供の頃の遊び場で、池の魚を釣って怒られたりした場所でした。その頃はまさかこの文化財庭園の管理することになるとは夢にも思っていませんでした。

庭園に使われている庭石は、大抵地元の河川にある石です。しかし、樹木は、アカマツやスギ、ケヤキ、イロハモミジ、シダレヤナギ、マメザクラ、サワラなど、元々北海道にはない木です。わざわざ本州から持ってきて植えています。本州で見



図5 旧岩船氏庭園 林床のコケが美しい 2021.6

た庭の景色を北海道に再現しようとしてつくられたようです。

スギ林は、一時すごく荒れていて、落ち葉だらけで、林床のコケも今のように綺麗ではありませんでした。それを文化財の指定を受けるにあたって整備されました（図5）。

庭園には池があり、池の上流側には水が流れていましたが、庭園の奥側が宅地化されてから水が枯れてしまいました。雨が降ってようやく流れる程度です。ここの流れの部分に関しては、護岸の石は崩れたまま、土も堆積したままで、復元はされていない状態です。できればこも綺麗に土砂を取り除いて、元の地盤を出して、傾いた石は直して、伸びすぎた木は伐って、復元すればいい景色になると思います（図6）。



図7 旧岩船氏庭園 レンガ造りの温室 2019

香雪園内には明治のレンガ造りの温室があります。この建物の後ろのモミは、本州から持ってきて植えたものです。その他、アカマツ、クロマツ、トドマツは重なり合っています。どの木も今は成長して樹高30m以上あります（図7）。



図6 旧岩船氏庭園 池上流部の流れ 2017.10

北海道の気候風土・樹木

北海道の植生は基本的に落葉樹林帯で、ミズナラ、イタヤカエデ、シラカバ、ハルニレ、エゾヤマザクラ、その他ヤナギなどの落葉樹が自生しています。常緑樹は針葉樹のイチイ、トドマツ、アカエゾマツが主体で、その下に灌木のツツジ類、シャクナゲ等が自生しています。常緑広葉樹は生育しませんが、最近では地球温暖化の影響でツバキが育つようになっていきます(図8)。

庭石・石材

変斑れい岩、赤色チャート、かんらん岩

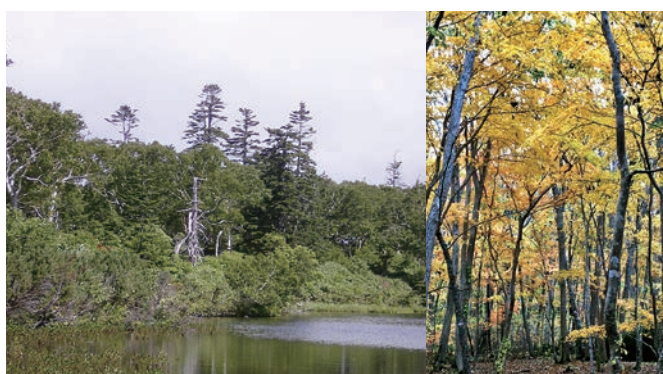


図8 北海道の樹木
右:ミズナラとイタヤカエデで構成された森 大沼国定公園 2021.10
左:寒さ厳しい高山のトドマツ ニセコ町 神仙沼 2019.6

らん岩は、北海道では日高石と呼ばれており、かつては庭石として重宝されましたが、今では使うことは滅多にありません(図9・右)。

函館近郊の七飯町で産出する安山岩は、反球面レンズ状の綺麗な節理があります。このような節理のため、



図9 右:日高石(A:変斑れい岩 B:赤色チャート C:かんらん岩) 中:安山岩(反球面レンズ状節理がある)
左:火山岩(駒ヶ岳産出) 自社資材置場にて 2022.5

使いづらく、一般的に栗石や骨材に使われていますが、当社では石積や石張りに使っています(図9・中)。

函館市から東北に位置する火山駒ヶ岳の麓の森町で産出される火山岩は、2010(平成22)年に開催した北海道の伝統庭園技藝で使用されました。非常に水通しが良く、割れにくく、風化せず、軽くて加工もしやすく、コケも乗りやすい石です(図9・左)。

おわりに

ある造園屋に勤める若者の「何故、この庭はいいのか。いいと思うのだけれども、どこがいいのかわからない」という問いに、私なりに考えたことを話してみたいと思います。

普段、庭をつくる場合どうしているのかというと、具体的には「黄金比」が挙げられます。「黄金比」というのは、デザインをやっている人は、この比を使っていると思います。これと関連してよく使われるのが、フィボナッチ数列です。自然界で美しいと思われる部分には大概当てはまります。オウムガイだとかヒマワリの種子の並び方や台風の渦巻きにフィボナッチ数列が現れます。人工的なもので有名なのは絵画モナリザの顔と体の対比だとか、エジプ

トのピラミッドなどがあります。庭の関連で言えば、金閣寺や龍安寺の庭のバランスも黄金比で表されていると言われています。

それに対して、白銀比があります。別名大和比とも呼ばれ、日本人の目には安定して見えるようです。

庭石で言えば、石の裾がずっと地面の中に入っている据え方も比率で表せるのではないかと思います。おそらく、巨匠と言われる人たちは体の中に黄金比が染みついている、無意識にその比率で庭をつくっているのではないかと思うのです。

一度こういった比率を意識して、ものをつくるというのも、美しさを見極めるための訓練になるのではないかなと思います。私自身は普段はあまり考えていませんが、よほど広い敷地で、どうしようかなと困ったときに、その割合でものを置いてみようかと考えるときはあります。

改めてこれを徹底的に使ってものをつくってみるのもちょっと悪くないのかとも感じました。

皆さんは「美」というものに対してどのように向き合っているのでしょうか。何かいい考えを持っている方あれば、ご教示いただきたいと思います。

写真:全て筆者撮影

(正会員)

作庭事例紹介



④玉石園路 函館市内W邸

②の石積柵の内側です。右の石敷き園路は虫食い状に敷いています。左はカーブを見せたかったので、虫食いとせずあえて縁が出るように玉石を敷き詰めました。(2021.6)



⑤竹垣の目隠しと石垣 函館市内I邸

住宅の入り口ですが、手前にあるバス停が気になるということで、石垣の上に竹垣の目隠しをつけました。あまりしつこくしたくなかったので、ひしぎ(丸竹にノミで縦に切れ目を入れ、1枚の竹の板にのしていく方法)の竹垣をつくりました。下部は火山岩を用いた崩れ積です。(2008)



⑥火山岩の石積 函館市内W邸

火山岩の石積です。ここからは恵山という火山が見えます。竣工当初は芝生が真新しく、樹木支柱もあり、馴染んでいませんでしたが、10年近く経っていい感じの雰囲気になりました。(2017.7)



③版築土塀を施した安山岩の石積 函館市内M邸

石灰と地元の土、粘土を使って版築土塀をつくりました。北海道は凍上があるので、土塀は向かないと諸先輩方が言っていましたが、私はいろいろ試しています。水分がかからないように屋根掛けをすればいいのではないかと、ここでは屋根掛けしました。この屋根材と棟材はクリを使用しました。クリ材を大体1cm以下ぐらいの厚さに割って、それを重ねて屋根にし、水分の侵入を防いでいます。今年で4年目くらいになりますが、とりあえず持っています。ただ、裏側の水が跳ね上がる方は水分がかかるため、どうしても凍上で少しずつポロポロ崩れていますけれども、それも一つの景色かなと思って楽しんでいます。

ちなみに凍上現象では、霜柱1cm³でおおよそ60kgの重さのものを持ち上げます。そのくらい霜柱は強いのです。そこで、北海道では、飛石や敷石を据える場合は、厚さ30cmくらい碎石を入れます。洗い出し舗装の場合も碎石が20~30cmは入っています。下処理に手間が掛かりますが、そのような対策をしないと凍上して2、3年すると飛石や敷石がガタガタな状態になってしまいます。(2021.5)



①日高石の石組 函館市内F邸

真ん中の石は日高石です。日高石もいろいろあってこれは蛇紋岩です。右奥の水が溜まっている石は、反球面レンズ状節理という安山岩です。その半球面レンズ状節理の部分を利用して、水鉢にしたものです。敷石には、安山岩の土に埋まって錆がついたものを使用しています。



②木柵 函館市内W邸

少し目障りな柵があります。エゾシカが植えてあるイチイの新芽を食べてしまうので、木の柵をしました。少し殺風景なため、下の段の両面は栗石を積んでいます。とにかく今はエゾシカが増えて食害がひどいのです。ここに植えたヤブランやツツジ類の新芽も食べられます。(2018)

良いものを見なさいとアドバイスされる理由は審美眼の訓練ではないか。私も思うところがあり感慨深く心に響きました。今後の作庭や育成管理に活かせるよう勉強を重ねていきたいと思います。(正会員)

北海道の庭園の歴史的経緯から、五稜郭の大きくなり過ぎた樹木の絶妙な整枝管理や、函館の気候風土ならではの作庭、樹木や石材の特色、そして「美しさ」について、先生の作庭例を拝見しながら学びました。なぜこの景色が良いのか。黄金比・白銀比・フィボナッチ数列：自然界や宇宙、人工遺産ではピラミッドや法隆寺にも現れる3つの比率を読み取れるからです。これらの視点を普段から意識して作庭することが訓練になり、比率など計算しなくても巨匠たちは、これらが体に染み込んでいるのでしょう。

「庭が良いのはわかる。しかし、どこが良いのか分からない」
ある若い庭師から受けた相談が紹介され、講義が始まりました。

美しい庭をつくりたい 池内康祐
1983年生まれ、愛媛県出身。愛媛大学卒業後、家業に従事。好きな庭：對龍山荘(京都府)、臥龍山荘(愛媛県)、天龍寺(京都府)

庭に向かう私の姿勢

第2回 『曹源一滴水』

2022 (令和4) 年6月26日 (日) オンライン講座

木目田 裕一
きめだ ゆういち

はじめに

自己紹介がわりに、私にとって大事な庭園と景色を紹介します。

1カ所目は、私が京都に行く際、必ずと言っていいほど訪れる大徳寺塔頭・高桐院の庭園です。

ここは細川忠興が父藤孝のために創建した寺です。忠興は戦国時代、織田信長、豊臣秀吉、徳川家康の3代に仕えた非常に有力な武将です。

参道は、山門までは真の参道(図1)、門をくぐると少し砕けた行の参道(図2)になります。春夏秋冬どの季節に行っても緊張感があってなおかつ吸い込まれるような参道です。客殿の前の庭は、通称「楓の庭(図3)」と言われています。無駄を

【木目田裕一プロフィール】



1977年東京都町田市生まれ。大学卒業後、自転車で行く本各地の名園・名所巡りのち、世田谷区群芳園にて修業。2007年、東芳庭苑設立。個人のお庭を中心に事業を展開。



図2 高桐院 行の参道 2014.9

図1 高桐院 真の参道 2014.9

切省いた構成になっている素晴らしい庭です。本殿前に瓦で仕切られた直線の雨落ち、つづくコケ地に囲まれて灯籠が1基あり、その周囲にカエデがあり、その奥に竹林、さらに奥に土塀の直線があります。何時間でも見ていられる、いろいろと考えさせられる空間です。

庭の見どころの一つとして、降り蹲踞があります。これは、加藤清正が朝鮮出兵の折、現地の城の礎石を持ってきて水鉢に加工したとされ、袈裟型の手水鉢と呼ばれています。

私の趣味の茶道とも繋がる茶室が二つあります。裏千家十三代円能斎好みとされる「鳳来」と北野大茶会に際してつくられた「松向庵」を移築したとされる「松向軒」は、どちらも歴史ある茶室です。

境内には忠興とガラシャ夫人の墓所も残り、墓石となる灯籠は別名「欠け灯籠」とも呼ばれ、利休、秀吉との逸話が残っています。

2カ所目は、養沢溪谷です。東京の都心から1時間ほど西に向かうと、秋川の支流・養沢川にこの溪谷があります。古くはヤマトタケルが水を飲んだとされる伝説の川です。私が仕事で使う石積用の石を採りに、ここで川の流れ(図4・5)で



図3 高桐院 楓の庭 2014.9

すとか、木のあり様(図6)などを見て時間を過ごすことが多々あります。春夏秋冬どの季節に行っても長居してしまう場所の一つです。

私の庭に向かう姿勢

「曹源一滴水」という言葉があります。中国において禅宗の土台をつくった慧能禅師の教えが広まっていくことを表しています。慧能禅師は、広東省の曹源溪谷に住んでおり、その溪谷の宝林寺の住職をしていました。曹源から流れる一滴が大河へと広がるようにという意味です。この言葉は、「私の庭に向かう姿勢」に通じていると思います。そこで、学生時代からの体験をお話します。

学生時代は、植木屋や造園屋でのアルバイトを通じて、その仕事の楽しさを覚ええました。この頃は時間があつたので、バイクで兼六園を見に出掛けたり、キャンプ道具を積んで中国地方に行ったこともありました。

実家は植木屋でした。もともと環境問題や砂漠緑化に興味があつたのですが、現場に出ることによって造園の奥深さや楽しさを知り、生業とすることを心に決めました。

大学卒業後、アルバイトで貯めたお金で買った自転車で行く日本各地の名勝・景勝地を巡る旅に出ました。



図5 養沢渓谷 清流と苔むす岩の溪谷美 2014.9

『名園の見どころ(註1)』を参考にし
て、関東、東北、北陸、九州、沖縄
を約10ヶ月かけて回りました。

その旅で、いろいろな方に出会
いました。まだ寒いから中に泊まっ
ていきなさいとワンボックス車を置
いていつてくれた方、公園でテント張
りをしていたら、声を掛けてくれて
自宅に泊めてくれた方、弁当を差し
入れてくれた方、一緒に自転車
で数日間旅をした方々などです。

仙台市では、造園会社を営む鎌
田耕氏にお世話になり、手掛けら
れた庭を見せてもらい、仕事の手伝
いもさせてもらいました。青森県弘
前市では造り酒屋のお宅にお世話
になり、一宿一飯の恩義で、マツの



図4 養沢渓谷 表情豊かな溪谷の流れ 2014.9

手入れをさせてもらった記憶もあり
ます。

一番思い出深かったのは、岩手の
山中で一人の小学生に出会った時の
ことです。キャンプができるところ
を尋ねたら、その子は学校のグラウ
ンドを紹介してくれ、教頭先生に話
をしてくれました。教頭先生から晩
御飯に誘われ、話をする中で、私の
自転車旅のことや庭について、小学
生に授業をして欲しいと頼まれました。
山の中の小学校で50人前後ぐら
いの生徒に、短パンTシャツ姿で
庭についての授業をした記憶は、今
でも鮮明です。

この旅で、庭以外にも名勝・景勝
地、風景を見たり、鳥海山に登った

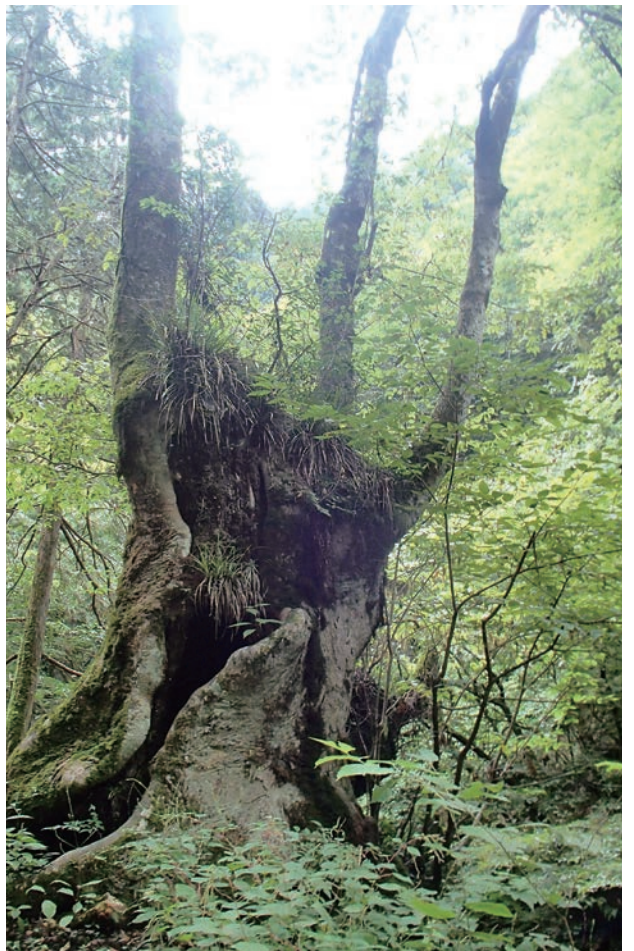


図6 養沢渓谷 時を刻む風格のある古木 2014.9

り、白神山地を歩いたり、奥入瀬溪
谷にキャンプして何日も見て歩いた
り、庭や自然に関するものは十二分
に見て歩きました。

旅の途中で、どなたにご教示いた
だいたかは定かではありませんが、「安
土桃山時代に芸術は完成の域に達し
ていて、工芸や焼き物、書、庭、建
築もそうではないか」、という言葉
が美術品、美術館とか建築、骨董品
などを見て歩くきっかけとなりました。
それから幅広くいろいろとももの
を見るように努めております。

庭の知識や技術、植木の手入れを
深く知ること、世間やお客様に恩
返しできていたらいいなと思っ
ております。

私の行動を表すとしたら、大徳寺
塔頭の大仙院で見つけた言葉となり
ます。

心は行動となり

行動は習癖を生む

習癖は品性をつくり

品性は運命を決める

その庭を勉強しようとか庭を見た
いという気持ちが行動となり、この
行動が習慣になり、その習慣が自分
の品性をつくり、その品性が運命と
か、仕事とかを開拓していくもの
になっていくと捉えています。

これからも「探求する心」、「温故
知新」、「恩返し」、そういうものが
私の庭に向かう姿勢になってくるの
ではないかと思っております。

作庭事例紹介



⑥静岡県の個人邸

お客様は農業を営んでおり、駐車場で採れたての野菜を販売していました。販売のためのスペースを四半敷きで広く取り、その周りを取り囲むように三和土の園路、切石と合わせました。この四半敷きは空間を広く見せるという効果があり、デザイン的にも庭の中に取り入れやすいと思います。

富士山の黒ボク石を鉢に見立て、植え穴を掘り、そこにカエデを植えています。窓から縦長の掛け軸のように見える景色となりました。(2019.8)



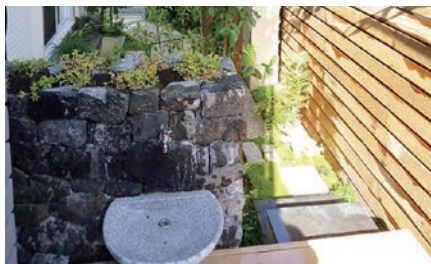
⑦あきる野市の個人邸

10年近く手入れで通う裏千家の茶道の先生の庭です。茶室前の四ツ目垣を外して、土塀を提案しました。土塀の高さや厚み、スッカリとした瓦を使うことを意識し、腰積みの高さ、軒の出し加減にも気を配りました。土塀の高さをあえて低くし、人の気配を感じやすくしました。茶道は、音や気配を非常に重要視しますが、感じ過ぎると野暮になるので、その辺のバランスが難しかったのですが、土塀に穴を開けたことで軽やかさもあり、空間の抜けの部分もできて良かったと思います。(2022.6)



④世田谷区の個人邸

学生時代から20年近く庭木の手入れをしているお宅で、リホームを機に庭の改修依頼がありました。三つの窓から見える景色に変化をつけました。一つは大谷石の成層積、もう一つは養沢溪谷の秋川石を使い野面の石積としました。これらを繋ぐのがRC造の壁で、奥へ行くに従って高さを下げており、奥行きを持たせるように工夫しました。水琴窟の水鉢、灯り取りの山灯籠、ベンチを配しました。(2018.2)



⑤横浜市の個人邸

狭い空間に石積、ウッドフェンス、版築などで変化をつけています。石積の高さ、園路の幅、ウッドフェンスの高さなど、囲まれていながらも狭く見えない工夫をしています。門柱の右手にある湾曲したベンチは、木材に熱を加えて曲げた特注品です。3人のお子さんとお父さんがこのベンチに座って、男同士の話をしてもらえたらいいなと思いながらつくりました。石積に組込んだ加工石の水盤は、地面から浮いており、面白いつくりです。(2017.6)



①八王子市の個人邸

もともと草地だった場所を、お孫さんと遊ぶ空間にしたい、メンテナンスも極力少なくしてほしいということで、板石張りで広がりのある空間を創りました。板石は本宅のタイルテラスから45度斜めに振って敷き、奥行き感を出しました。単調にならないよう、周りに洗い出しの園路、パーゴラ、緑のトンネルや秋川石を使った石積花壇を設けました。(2015.9)



②川崎市の個人邸

南国リゾートのイメージでという希望で、琉球石灰岩の石積で花壇をつくりました。その他の構造物は真砂土を使った版築、ウッドデッキに大谷石の花台です。ウッドデッキにはライトをはめ込んで、夜は下から石積を照らし、趣の異なる空間を演出しました。(2014.6)



③五反田の店舗

かつてこの辺りは海の中で、江戸時代初期に埋め立てが盛んに行われました。その埋立地が隆起したということをデザインコンセプトに組込み、版築で表現しました。版築の中には本物のサンゴや貝の層をつくり、遊び心を持たせました。隆起を山と捉え、その奥を谷として枯れ流れを設け、流れ蹲踞、灯り取りの灯籠を据えました。灯籠と水鉢は、要望により既存のものを使っています。店名「梨の家」に因んで、ナシの木を植えました。(2018.1)

おわりに

私は自転車の旅を終えまして数年後の28歳頃から、本格的に裏千家茶道を始め、かれこれ15、16年続けてきました。月2回ほどの稽古なので、なかなかお点前が上手くなりませんが、続けることが大切だと思います。

茶道は総合芸術的なところがあると思います。ものの見方とか、寸法、考え方に、庭と共有できることが非常に多いと思っています。

最近、「木目田宗裕」というお茶名をいただきました。ようやく茶道の道の門を叩いたといえますか、これから茶道の道を歩んでいく、大きな励みになりました。細く長く続けていこうと思います。お庭と共通すること非常に多いと思っています。



⑧町田市の個人邸

主庭は、庭の解体時に預かった中国産の黒御影石を使った石張テラスとしました。もともと山だったところを造成した宅地なので、その山の名残に、石積の一部に水鉢を据え、そこから絞り水が落ちるというイメージにしました。駐車場と玄関の景色には預かっていた御影の板石を使いました。二世帯住宅ですので、もともと1枚の板石であったものを半分に割って、門袖と門柱とし、それぞれに表札、インターホンをつけました。塀は秋川石積です。(2021.4)



⑨杉並区の個人邸

道路と敷地の高低差は恵那石を使った土留石積としました。また石積の上にウッドフェンスを設けて建物の縦格子と関連付けることにより、庭と建物等を一体に見せるように工夫しました。主庭は、軽井沢のハルニレテラスのイメージで、デッキを中心に庭を展開しました。ウッドデッキの前から洗い出しの園路が続き、石のベンチがあります。雨落ちは菊炭を使って遊び心を取り入れました。(2022.6)

して、茶道も仲間内で少し広げられたいというふうにも思っています。また、キャンプ場で野点を楽しんだりもしています(図7)。

造園も植木も自分の立ち位置としては、私がいろいろ勉強したことをお客様の庭に表現することで、お客様への恩返ししたいと思っています。また、造園界への恩返しという意味も込めて、日本庭園協会とか、植木業界の底辺を広げるような活動



図7 キャンプ場での野点のようす 2015.6

をしていきたいと思っています。

先ほどの大仙院の言葉をもう一度、

心は行動となり

行動は習癖を生む

習癖は品性をつくり

品性は運命を決める

この言葉とともに、まだもう少し早く庭道の方を歩んでいきたいと思っています。(正会員)

註1 河原武敏著『名園の見どころ』、東京農業大学出版会、1995

写真：全て筆者撮影

連続講座を受講して

やすだ ゆうき
安田 有希



2000年生まれ、東京都出身。日本大学理工学部まちづくり工学科の4年生として造園を主

木目田先生の大徳寺高桐院の「楓の庭」などの解説を通して、限りある空間の中であるのにも関わらずそれを微塵も感じさせないのにはなぜなのか、美しい写真を用いて説明していただいたおかげでビジュアル的にも分かりやすく、理解することができました。また自分の大学の講義では学べない、庭材がもたらす印象やそれらを組合わせることで多様な空間の見せ方ができることなどを教えていただけて、大変ありがたかったです。また庭に向き合う姿勢として、庭園や自然に触れる以外にも、美術館や骨董品を観に行ったり、茶道を学ぶなど先生のアンテナの広さにとっても感銘を受けました。自分も日々の中で視野を柔軟に広げていき、先生のような美的感覚を養っていききたいです。

本部・支部共催「新潟県庭園視察研修会」

2022（令和4）年7月2・3日

新潟県支部長 小林 紀昭 こばやし のりあき

はじめに



新潟県での庭園視察研修会の計画に至

るまでの経緯を説明します。3年前になりますが、前支部長の若杉松男氏より、「次の全国支部長連絡協議会の開催地は新潟になりました」と言われたことから始まりました。

当初、2月に協議会の開催を計画していましたが、その時期、新潟は積雪量が多く、庭園見学会は難しいということ、会議と庭園視察研修会とは別の時期に開催したいと申し入れました。本部から了解をいただきましたが、その頃からコロナが猛威を振るい始め、2年間開催できませんでした。

そこで今年は、コロナの状況を見ながら、会議はリモート開催とし、庭園視察研修会は時期をずらして行う計画を立てました。その後、本部より全国の会員を対象に実施できないかと相談を受け、今回のように会員の参加も募った形になりました。そのような事情から案内等で会員皆

様に大変ご面倒をおかけしたことをまずもってお詫び申し上げます。

新潟県庭園視察研修会の概要

研修会は、2022（令和4）年7月2・3日の2日間開催しました。参加者は、北は北海道、南は四国からの総勢30名です。視察場所は新潟市を中心にした下越地域の庭としました。

1日目は新潟駅に午後1時30分に集合し、貸し切りバスを利用して、最初に新発田市の「清水園」、次いで新潟市の「北方文化博物館」を見学しました。その後ホテルで懇親会を行いました。

2日目はホテルを午前8時30分に出発し、新潟市にある白山公園内の「燕喜館」^{えんき}、「安吾風の館」^{あんご}、「旧齋藤家別邸」^{ふじや}、「北方文化博物館新潟分館」を見学しました。イタリア軒で昼食をとり、解散しました。

昼食時に参加者から「ご苦勞様でした。大変楽しく見学させていただき、ありがとうございました」と労いの言葉をいただき、開催してよかったなと感じました。

視察庭園の概要

清水園

新発田藩3代藩主溝口宣直の時代に造営された藩の下屋敷があったところで、付近が清水谷という地名だったことから、「清水谷御殿」と呼ばれていました。昭和20年代、「清水園」と名称を改めています。

庭園は、4代藩主重雄の時代、元禄年間に構築されたものです。作庭したのは、江戸から招かれた遠州流茶人で、上柳甫斎^{かみやなぎはさい}の門下の幕府庭方の縣宗知^{あがたそうち}です。

藩主重雄は自ら茶の湯を好んだ人物で、流派は異なるものの茶の湯を通じての結びつきで、築庭に宗知が招かれたと思われます。

昭和20年代、「清水園」と改名された時期に、庭園は茶席を含めて改修されました。庭師は銀閣寺の清泉の石組の発掘復元をはじめ、各地の寺院や名園の修復を手掛けた田中泰阿弥^{たなかたいあや}です。京都から運んだ石を用いた古記録に基づいて修復した庭園は、茶席と池泉が一

体となって景観に溶け込み、越後から東北にかけ他に類を見ない大名様式を伝える名園です。

泰阿弥による改修は、1933（昭和8）年から6年間に渡り沢海^{そうみ}の伊藤邸（財）北方文化博物館と共

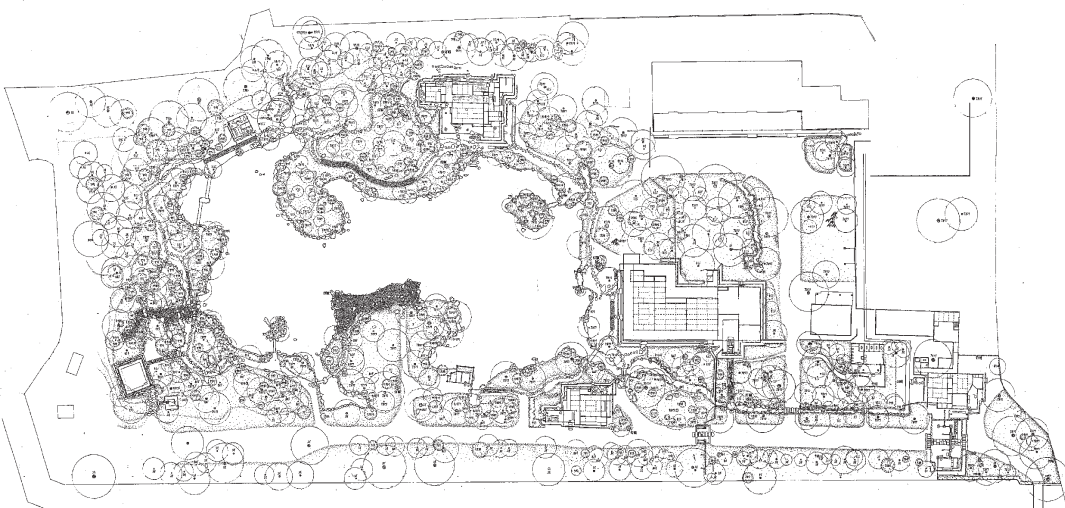


図1 清水園実測平面図 出典：『田中泰阿弥図録第一巻』、日本庭園協会新潟県支部 田中泰阿弥研究会、1999



図2 清水園 見学の様子

に手掛けられ、泰阿弥の代表作ともいえる庭園です。池の周りの桐庵・夕佳亭・翠濤庵・同仁斎・松月亭の茶室は、荒廃した庭園の修復工事と併せて茶人泰阿弥が自ら設計建造したもので、それぞれ趣の異なった構造で、独特な雰囲気があります。

2003（平成15）年に、「旧新発田藩下屋敷（清水谷御殿）および五十公野御茶屋庭園」として国の名勝に指定されています。指定に当たって「越後を代表する大名庭園である」として評価されました。

北方文化博物館

越後の蒲原平野を流れる阿賀野川

の西部に位置する小さな集落、沢海地域に、江戸時代中期、農により身を興し、代を重ねて豪農の道を歩み、やがて越後随一の大地主となった一族、伊藤家は、明治に入り、次第に農地の集積を計り、全盛期には1市4郡64町村に1370余町歩（1370万㎡）の田畑を所有、昭和期には県下一つとなっていった。

伊藤家の豪壮な本家は、敷地8千8百坪（29100㎡）建坪千2百坪（3967㎡）と部屋数65を数える純日本式邸宅で、8年の歳月をかけて1889（明治22）年に完成しました。時代は代わり戦後の農地解放によりこれらの土地と建物は伊藤家の所有から離れ、終戦半年後の1946（昭和21）年に創設された「財団法人北方文化博物館」へ全てが寄付されました。

現在は、豪農の館「北方文化博物館」として一般公開されています。巨大な邸宅は長年の風雪に耐え、往時の面影をそのままに豪農伊藤家の暮らしを今に伝えています。

庭園は、「この庭を以て千人の茶人をもてなす」という、七代目伊藤文吉の構想の下につくられました。作庭を託されたのは清水園と同じ田中泰阿弥です。築庭には5年をかけ、1958（昭和33）年に完成し

ました。

泰阿弥に託される以前の主庭は、大きな樹木が点在していただけの平地であったようです。泰阿弥は大きな池を穿ち、掘り出された土を使って対岸に大きな築山を造りその頂上に茶室「佐渡看亭」を設けました。この大きな池の配置にこの庭の最大の特徴が見られます。それは、これ以上近づけられないと思われるほど建物にこの池を接近させていることです。これにより座敷からは池を俯瞰するようが見せ、対岸の風景全体が取り込まれることとなります。

泰阿弥は軒内部分に独自の手法を展開しました。雨落ちの縁石に自然石の飛石や人工的な切石、巨大な座禅石まで配し、さらに小石を畳んだ延段を組み込み園路としても機能させています。

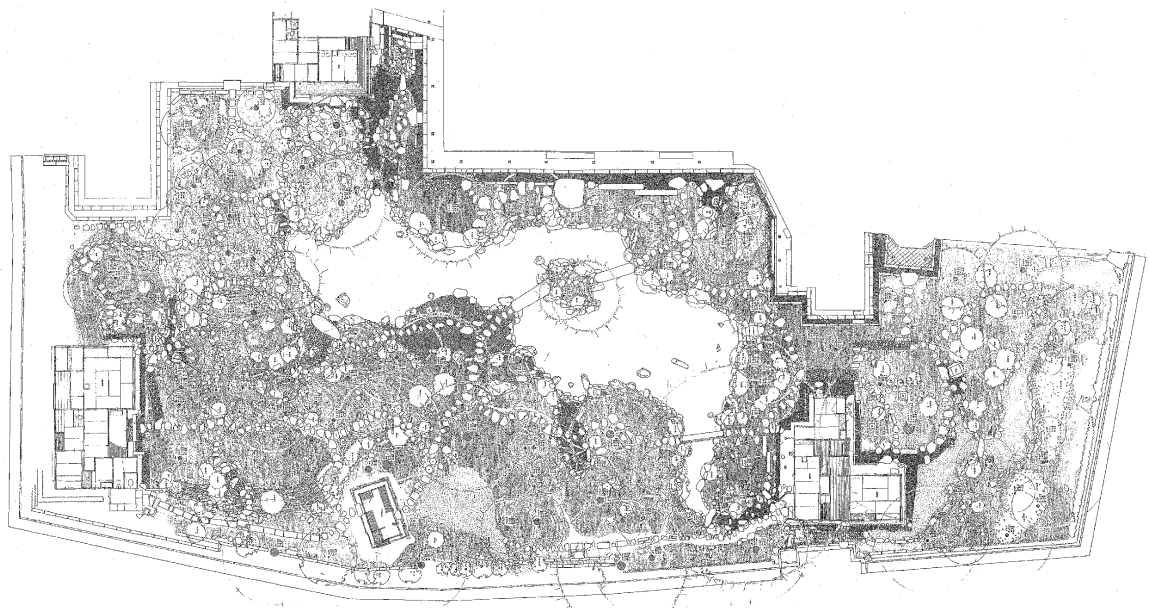


図3 北方文化博物館実測平面図 出典：『田中泰阿弥図録第二巻』、日本庭園協会新潟県支部 田中泰阿弥研究会、2005



図4 北方文化博物館 説明を聞く参加者

大きな棗型の手水鉢を配した縁先手水鉢廻りの役石は、雨落ちの一部に取り込まれていて、海に水が滞らない工夫もされています。

大広間角の右方に目をやると石橋越しに滝石が組まれ水が勢いよく落とされています。この滝の前を横切る石橋は地面より随分高い所に渡されているように見えますが、実際は周囲の地盤より僅かに高いだけなのです。これは深く掘られた池の水面と州浜、さらに飛石づたいに見上げてしまうための錯覚によるものなのです。その他、実際に庭を巡ると実に様々な景色に出会うことができます。特に豪快な滝石組と橋石との構成の見事さは秀逸です。

建物は2000（平成12）年4月に、国の登録有形文化財になりました。

燕喜館

明治から昭和にかけて活躍した商家、3代目齋藤喜十郎氏の邸宅の一部（明治40年代の建物と推定）を1997（平成9）年に白山公園内に移築再建したものです。

「燕喜館」の名称は唐時代の思想家・韓愈の「燕喜亭記」に由来し、「宴を催し、楽しみ喜ぶ」という意味から齋藤家が命名していたものが引き継がれています。以前の間取りや意匠を生かした「前座敷」「奥座敷」「居間」などを加えて、露地庭と一体になった本格的な「茶室」が設けられています。

庭園内には石庭を始めとし、水琴窟や貴重な灯籠が配置され、四季を彩る庭園になっています。

安吾風の館

建物は、第10代新潟市長として埼玉出身の柴崎雪次郎を迎えるにあたり建設され、1922（大正11）年10月に竣工しました。当時の新聞記事ではこの辺りは巨松の林に囲まれ、市の中心部を見下ろせる絶好な位置であると報じられています。

その後は、市外の人が市長に就任することがなくなったため、主に近隣首長や海外からのお客様との懇談など迎賓館的に使用されました。

1992（平成4）年につくられた庭園は、初代新潟奉行の川村修就の時代に植えられたと伝わる松群を残し海岸砂丘の面影を今に伝えると共に、枯山水等の伝統的庭園様式と機能的な芝庭を巧みに調和させた、新潟を代表する現代庭園の一つです。

現在は、新潟市生まれの坂口安吾の資料館になっています。安吾は太宰治、織田作之助らとともに無頼派と称され、純文学、評論、歴史小説など様々なジャンルで旺盛な創作活動を続け、戦後の文学や思想に大きな影響を与えた近現代日本文学を代表する小説家の一人です。

旧齋藤家別邸

明治から昭和初期にかけて、新潟の三大財閥の一つに数えられ、衆議院議員・貴族院議員を歴任した豪商・4代目齋藤喜十郎が1918（大正7）年に建てた別荘です。

庭園は砂丘地形を巧みに利用し、都会でありながら深山幽谷の趣を仕立て、周辺には見られない滝や沢流れ、池泉といった水辺空間をつくり上げた回遊式庭園です。作庭者は東



図5 旧齋藤家別邸 見学のように

京の2代目松本幾次郎ともその弟亀吉とも言われています。完成までに3年の歳月と巨万の費用をかけた庭園には、浩養園（註1）（東京都墨田区）など江戸の大名庭園から選り抜かれた数多くの名石・石造物が運び込まれています。庭園と建物を一体とする「庭屋一如」の趣向で造られた開放的な建築は随所にさりげなく銘木を使うなど巧みな演出がなされています。

2013（平成25）年に、「旧齋藤氏別邸庭園」として国の名勝に指定されています。指定に当たって「庭園が大正時代における港町・商都新潟の造園文化の発展に寄与した庭園である」として評価されています。

北方文化博物館新潟分館

1895(明治28)年頃の建造で、大正初期に7代目伊藤文吉が新潟の別邸として購入しました。別邸の洋館で歌人・美術史家・書家として名高い會津八一がその晩年を過ごしました。

枯山水庭園からは八一が暮らした洋館が望め、庭園内には「秋艸道人(註2)」の歌碑が建てられています。

新潟市生まれの八一は、新潟放送初代社長の坂口献吉(作家・坂口安吾の長兄)より懇請されて「夕刊ニイガタ」の社長を引き受けました。

献吉は八一の住居として、伊藤文吉の持ち家である新潟別邸に白羽の矢を立てたのです。八一はこの洋館を「南浜秋艸堂」と呼んで、75歳で亡くなるまでの十年間を過ごしました。

この建物には、現在、博物館として八一の書や資料などが展示されています。2000(平成12)年に登録有形文化財になっています。

視察研修会を終えて

今回は天候に恵まれすぎて、2日目の暑さは参加者皆さんの体力を奪ったのではないかと思います。見学場所が隣接しているため徒歩での見学でした。本当にご苦勞様でした。また、2日目にはアイドルのコ

ンサートがあったためタクシーの事前予約ができなくなり、さらに、auの電波障害が発生したことにより連絡が上手くとれず、本当にバタバタしてしまいました。いろいろと参加者にご迷惑をお掛けしましたことを、この場を借りてお詫び申し上げます。

新潟県には、今回視察した庭園の他にも「貞観園」など多くの庭園がありますので、今後時間を作りご覧いただけたら幸いに思います。

今回の庭園視察研修会では、高橋康夫会長を始め広瀬慶寛技術委員長、参加者の皆様や支部会員の方々など多くの皆様にご協力いただきました。最後になりましたが、御礼申し上げます。

註1 旧佐倉藩堀田家別邸の名園で、浩養園の名で呼ばれていた。現在、アサヒビールのビルや墨田区役所となっている。
註2 会津八一の雅号

参考文献

- ・『清水園』案内書
- ・『田中泰阿弥生誕百年記念展 田中泰阿弥図録第一巻』1999
- ・『北方文化博物館』案内書
- ・『孤高の庭師 田中泰阿弥展 田中泰阿弥図録第二巻』2005
- ・『燕喜館』案内書
- ・『旧市長公舎 安吾風の館』案内書
- ・『旧齋藤家別邸』案内書
- ・『北方文化博物館新潟分館』案内書

写真：見学当日、筆者撮影

新潟県庭園視察研修会に参加して

酒井和佳子



1961年生まれ。東京都出身。イラストレーター、美術講師を経て庭師を志す。好きな言葉・

掬水月在手

梅雨明け直後の強い日差しなのか、新潟県支部の皆様と講師の先生方のご案内をいただきながら、清水園、北方文化博物館、白山公園、燕喜館、旧齋藤家別邸、北方文化博物館別館、安吾風の館の庭園鑑賞をしました。

新潟の風土に依るものでしょうか、これらの庭には独特の情感があり、建物と庭の関係にこの地ならではの風情が感じられました。そして一番心に残ったのは、田中泰阿弥の心意気を強く感じる景色を見ることができたことでした。

茶道に通じ、建物の造作にもこだわりを持つていたという泰阿弥の庭の見せ方が、庭と建物との関係を常につくっていること、どの角度から見ても絵になる緻密さ、自然を模した豪快さと優美さ、視野が広がった狭まったり、視線の誘いの妙に胸が躍りました。

特に変化に富んだ豪快な滝石組や石橋、起伏に配され動線を誘導する

石段、飛石、延段、自然石、切り石と小石の組み合わせは実に多様で面白く、気に入った石を妥協なく求めたという話を、目で見て確かめることができました。

あちらこちらに仕込まれた遊びが粹で、中でも建物まわりの造作に魅了されました。庭に据えられた石が、建物や茶室の軒下に変化に富んだ形で入り込んでいく様子が、とても力強く美しいのです。そしてそれらが決して奇を衒ったものでなく上品であることを凄みとして感じました。

また、諸先輩方と庭を回り、その佇まいと言葉に触れたことは、私にとっても貴重な体験になりました。

泰阿弥の庭を図面に起こす作業のこと、郷土の庭の研究、庭園の全面修復、それらをやり続けてこられた先輩方のお話や、かつて黒姫山から三代かけて石を運んだ話など、とてもロマンチックであり、庭仕事への情熱と意味を感じる旅になりました。

日本家屋の美しさ、生活文化を豊かに彩る庭というものの考察を深める事に心を注いでいこうと、改めて思う機会にもなりました。

新潟の庭をもっと知りたい、四季折々に訪れてみたいと強く思っています。(広報委員)

本部・委員会からのお知らせ

「みんなの緑学」申込受付中

長尾欽弥とよねゝその人物と本宅・別荘の庭園を巡って

「わかもと製菓」の創業者で庭園に造詣の深かった長尾欽弥とその妻よねの人物像に焦点を当てながら長尾本宅の宜雨荘と別荘の扇湖山荘と隣松園の貴重な古写真や邸宅にまつわるいくつかの逸話を紹介します。

これらの邸宅の庭園は、若き日の岩城巨太郎の作庭です。長尾夫妻は、作庭を任せることによって東京に出てきた頃の巨太郎を支えていました（第108号参照）。

さらに、庭園だけではなく二人の生き様にも言及します。

講師：加藤映氏

日時：11月24日（木）

13時30分～15時30分

場所：日比谷公園内

緑と水の市民カレッジ

受付：日本庭園協会事務局

e-mail: gsj20@m7.dion.ne.jp

FAX: 03 (3204) 0595

定員：先着25名

受講料：2000円（資料代込）

総務委員会

●日本庭園協会創立105周年記念

事業アイデア募集！

来年、2023年は日本庭園協会が創立105周年を迎えます。

また、当協会とかかわりが深い公園制度の誕生から150周年という節目の年にも重なります。

そこで、来年を創立105周年記念イヤーとすべく事業展開を図ろうと考えています。

現在、シンポジウム、記念講演会、

東日本大震災復興記念庭園見学ツアー、清澄庭園連続講演会冊子発行などが候補に挙がっていますが、会員の皆様もこの記念事業に企画段階から参加していただきたく記念事業のアイデアを募集したいと思います。

庭園協会事務局宛、メールかFAXでお寄せ下さい。斬新なアイデアをお待ちしております。なお、締め切りは11月30日（水）です。

e-mail: gsj20@m7.dion.ne.jp

FAX: 03 (3204) 0595

●2022（令和4）年10月22日

（土）～10月30日（日）までの9日間、「第20回日比谷公園ガーデニングショー2022」が3年ぶりに開催されます。

当協会は、前期10月22日（土）～26日（水）の5日間、出展します。パネル展示、庭園協会ニュース配布などによる当協会の活動を紹介しま

す。当該期間中にご来場の折は、お立ち寄りください。

●龍居竹之介名誉会長のロングラン講演会は、第3回：7月20日（水）を予定していましたが、新型コロナウイルス感染症第7波の拡大傾向に考慮して延期となりました。また、9月21日（水）には、『現代から幕末までの暮らしと庭世界』と題して開講されました。

技術委員会

●第13回庭園技術連続基礎講座・テーマ「庭に向かう私の姿勢」は、オンライン配信とし、全国から多くの会員の参加を得て順調に開催されました。第3回：7月31日（日）講師・廣瀬慶寛氏（仲佐修二氏の代講）、第4回：8月28日（日）講師・仙波太郎氏、第5回：9月25日（日）午前の講師・石亀靖氏、第6回：9月25日（日）午後の講師・仲佐修二氏（第3回の補講）。それぞれに発想の原点や近作が紹介され、講演後は活発な質疑応答が行われました。

講座内容は、庭園協会ニュースに順次掲載いたします。

●本年秋に予定していました本部・宮城県支部共催の伝統庭園技塾「高木枝打ち剪定講習会」は、開催中止といたします。詳細は、別途お知らせの通りです。

国際活動委員会

この度、国際活動委員会の活動の一環として、7月22日から8月10日までの20日間、細野達哉氏（国際活動委員）が単独でアメリカへ行って参りました。

訪米の主な目的は次の3点です。

- ①ポートランド日本庭園が運営するInternational Japanese Garden Training Center主催の日本庭園講座「Waza to Kokoro - Hands & Heart Level I Seminar（技と心セミナー）」の客員講師として講義
- ②令和元年の国交省海外日本庭園再生プロジェクトにて故三橋一夫氏（前国際活動委員長）率いる協会メンバーが修復工事を行なったシカゴ・ジャクソンパーク内フェニックスガーデン（大阪ガーデン）の視察
- ③当協会と提携関係を結んでいる北米日本庭園協会（NAJGA）の地



「技と心のセミナー」座学講義のようす
ポートランド日本庭園提供

方大会への参加

「技と心セミナー」が行われたオレゴン州ポートランド市から、イリノイ州シカゴ、そしてNAJGAが行われたロックフォード市のAnderson Japanese Gardensまで、その移動距離に比例して収穫も多い、大変有意義な訪米になりました。それぞれの詳しい内容については次号の本誌にて掲載の予定です。

令和4年度大臣表彰

●厚生労働大臣表彰

国土交通大臣表彰が7月11日付で発表され、当協会では山田拓広氏が受賞されました。



山田拓広氏

理事・近畿支部長

花豊造園株式会社

代表取締役

表彰理由（国交省発表より）

多年造園工事業に精励するとともに関係団体の役員として業界の発展に寄与した

●外務大臣表彰

外務大臣表彰が8月4日付で発表され、当協会では内山貞文氏が受賞されました。



内山貞文氏

評議員

ポートランド日本庭園

チーフ・キュレーター

功績（外務省発表より）
アメリカ合衆国における日本文化の普及
受賞された山田拓広氏、内山貞文氏に心よりお祝い申し上げます。

会費納入のお願い

当協会は、会員の皆様の会費によってより運営しております。今年度会費の納入がまだお済みでない方は、速やかな納入をお願いいたします。

「日本各地・庭園の冬支度」の写真募集

日本各地の「庭園の冬支度」の写真を集めます。掲載は111号（2023年・新年号）の予定です。街で目にした地域色あふれる冬支度や自作の門松などの写真と解説をお寄せください。まずは協会事務局宛にエントリーしてください。詳細は別途お知らせします。



旧岩船氏庭園（香雪園）の雪吊り
2020.12 桃井賢二氏撮影

2022（令和4）年総目次

110号							109号							108号							107号						
便り	会報	報告	講座	講座	講座	巻頭言	便り	募集	報告	報告	コラム	講座	講座	講座	巻頭言	便り	報告	報告	講座	講座	講座	便り	会報	報告	講座	講座	巻頭言
本部・支部からのお知らせ	国土交通大臣表彰 山田拓広氏 外務大臣表彰 内山貞文氏	「新潟県庭園視察研修会」 本部・支部共催	第13回 庭園技術連続基礎講座 第2回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	第13回 庭園技術連続基礎講座 第1回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	第13回 庭園技術連続基礎講座 第1回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	家には庭が必要ですよ みんなの緑学 現代日本庭園の巨匠 第3回 飯田十基 第13回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	新潟県支部からのお知らせ	「日本各地・庭園の冬支度」の写真募集	本部委員会及び支部組織 設立総会に参加して	国際活動委員会（欧州日本庭園協会） 本部委員会に加盟して	「おもてなし」米園ガーデニングを歓迎す おもてなし 米園ガーデニングを歓迎す 米園ガーデニングを歓迎す	第12回 庭園技術連続基礎講座 第2回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	第12回 庭園技術連続基礎講座 第2回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	第12回 庭園技術連続基礎講座 第2回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	「いいね！雑木の庭」中村さん、掃除を しなくていい庭を作ろう！ みんなの緑学 現代日本庭園の巨匠 第2回 齊藤勝雄 第12回 庭園技術連続基礎講座 庭園技術連続基礎講座	私のライフワークとターニングポイント 令和4年度日本庭園協会定期総会 みんなの緑学 現代日本庭園の巨匠 第1回 岩城恒太郎	全国支部長連絡協議会報告 「くまもと花とみどりの博覧会」が開催中	新役員紹介	第1回 岩城恒太郎	第1回 岩城恒太郎	第1回 岩城恒太郎	本部・支部のお知らせ	現代の名工 厚生労働大臣表彰 大平晶氏 越智将人氏	日本造園アカデミー会議主催 造園 シンポジウム「災い転じて希望となす」 シンポジウム「災い転じて希望となす」	第12回 庭園技術連続基礎講座 第1回 前茶精神と庭 そのかわりをさぐる	第12回 庭園技術連続基礎講座 第1回 前茶精神と庭 そのかわりをさぐる	温故知新 日常を取り戻す 庭を見に行こう！ 新年の挨拶
		小林紀昭	木目田裕一	桃井賢二	龍居竹之介	越智将人		曾根将郎			広報委員	北村葉子	龍居竹之介	和田新也	中村寛	小林紀昭			荒川淳良	龍居竹之介	岩城隆	榊原八朗			横山英悦	高橋康夫	水本隆信

新入会員・氏名（住所）

（2022（令和4）年7月1日から9月30日入会）
美谷幸一（鳥取県）、クガ・セ
ルジオ・稔（千葉県）
（入会順・敬称略）

訂正とお詫び

前号（109号）で、本部委員会・支部組織のお知らせで、神奈川県支部長の名前に誤りがありました。
（誤）米谷拓末（正）米山拓末
訂正してお詫び申し上げます。

編集後記

★巻頭言の写真は、筆者自邸の庭の1シーンです。このような爽やかな景色が浴室から眺められたら、疲れも一気に癒されるでしょう。（や）
★みんなの緑学「飯田十基」では、雑木の庭づくりの創始者であり、当協会の理事長として尽力いただいた先人の歩みはもちろん意外な面も知ることができ、勉強になりました。（う）
★新潟庭園視察研修会の報告、参加者の感想からも新潟の庭園のおもしろさや魅力が伝わり、是非訪れたいと思いました。（な）

★「みんなの緑学」、「庭園技術連続基礎講座」の校閲は小沼康子と内田均が担当しました。

編集担当・小沼康子／内田均／中山なつ希／酒井和佳子
本文デザイン・由比まゆみ